



- 永代共養墓について
- ぶつぶつ雑記ブログ
- 真言宗について
- 金剛院イベント情報
- 金剛院 建築計画
- しいなまち・みとら
- 唱えてみよう!
- 仏教一年生
- 金剛院News
- メールを送る
- こんごういんキッズ!
- たいけんしてみよう!
- まんが小坊主くん!
- 金剛院について
- おすすめリンク集
- メディアで紹介
- 東京お寺めぐり
- ぶつムクイズ
- 金剛院の四季
- バックナンバー
- ほほほのれしび
- ふしぎな密教法具
- 地区・アクセス
- サイトマップ

 検索

エッセイ 仏教一年生

- 第37回 [「智の器」としてのお寺の面白さ](#)
- 第36回 [日食メガネと雨男](#)
- 第35回 [東日本大震災一周年に想うこと](#)
- 第34回 [インドマジックで被災地に笑顔を「2」](#)
- 第33回 [インドマジックで被災地に笑顔を「1」](#)
- 第31回 [井戸の話](#)
- 第30回 [五筆和尚伝説](#)
- 第29回 [縁の下をささえる人々](#)
- 第28回 [日本人、最高！](#)
- 第27回 [人間と占い](#)
- 第26回 [空海さんの謎](#)
- 第25回 [私の知らない私](#)
- 第24回 [記憶と感情](#)
- 第23回 [美人病にかかる\(後編\)](#)
- 第22回 [美人病にかかる\(前編\)](#)
- 第21回 [四億年の引きこもり](#)
- 第20回 [年齢を隠したがる人たち](#)
- 第19回 [若い時の苦労は買ってでもしろ](#)
- 第18回 [子離れの季節](#)
- 第17回 [35年目の回窓会](#)
- 第16回 [不老不死のお酒](#)
- 第15回 [アンチエイジング](#)
- 第14回 [女子力不足](#)
- 第13回 [仏のレッスン](#)
- 第12回 [母と子をつなぐ道](#)
- 第11回 [座敷わらし](#)
- 第10回 [夢のお告げ](#)
- 第9回 [犬に引かれて](#)
- 第8回 [生まれ変わり](#)
- 第7回 [お葬式の意味](#)
- 第6回 [不思議なご縁](#)
- 第5回 [生きるための勇氣](#)
- 第4回 [祖母の形見](#)

仏教一年生

山田真美・著



作家、日印芸術研究所言語センター長の山田真美さんの連載です。

[プロフィール紹介](#)

第29回 縁の下をささえる人々

BI 0 チェック いいね! 0 Tweet

前代未聞の猛暑が去り、一気に涼風の吹く季節となりました。皆さんはこの夏、花火大会をご覧になりましたか。夜空に咲く大輪の花を眺めながら、ビール片手にホッと一息つかれた方も多いことと思います。

実は、今からかれこれ30年ほど前の夏、ある大きな祭礼の晩に花火の打ち上げを手伝ったことがあります。そう言うと、

「一体どうして真美さんのところへは、マジシャンのアシスタントとか花火の打ち上げとか、珍しい話が次々に舞い込んで来るのですか」

と驚かれてしまうことが多いのですが、言われてみれば確かに、アルバイト情報誌に「花火師の弟子求む！」とか「マジックの胴体切りのモデル募集中！」なんて記事が載っているのを見たことはありませんね。

では、なぜ私のもとにはそんな話ばかりが転がり込んでくるのか。それは、一言でいうと、お友達にユニークな人が多いからです。30年前の当時、よく集まってワイワイ遊んでいた仲間のひとりが、地方では有名な花火師さんでした。その人からあるとき、

「明日の花火大会、ちょっと手が足りないんです。打ち上げの助っ人に来てくれませんか」

と頼まれた私は、一瞬の躊躇もせずに、

「はいはい、行きます！ お手伝いしますとも！」

と、文字どおり二つ返事で引き受けていました。

だって、花火の打ち上げなんて考えただけでも面白そうじゃありませんか。用心深い人ならこういふとき、(花火を扱うということは火薬が大量に置いてあるわけだから、危険が伴う作業かも知れないぞ)と考えるのかも知れませんが、私はそうは思いませんでした。なぜなら、私にこの話を持ちかけてきた友達は何代も続く古い花火師の家の息子さんで、これまで一度も事故を起こさず“優良企業”としてやってきたことを知っていたからです。

- [第3回 ありがとうの輪](#)
- [第2回 お釈迦さまのお顔](#)
- [第1回 算数と仏教](#)
- [仏教一年生 山田真美・著](#)



さて、そんなわけで突然、花火の打ち上げを手伝うことになった私。当日の待ち合わせ場所は、小高い丘の上でした。そこが花火の打ち上げ場所になるのです。丘の上には、私を含めて全部で10数人の「花火師の弟子」が顔を揃えました。

10数人の内訳は、打ち上げの手伝い歴数十年という大ベテランから、まったくのド素人の私まで色々。そのなかで女性は私ひとりでした。

かつて日本には「女はトンネル工事と花火の打ち上げに手を出すな(出すと事故が起こる)」という迷信があったのだそうです。

「それに、花火の打ち上げに興味を示す女の人って、少ないよね。男という生き物は、結構こういうことが好きなんだけど」

とも花火師は言っていましたけれど、「草食系男子」とか「肉食系女子」が増えたといわれる今の時代になってみれば、そういう男女の性差がほんとうにあるのかどうか、それすらも怪しいものですが。

まあ、それはともかく、新参者の私は何をどうしていいかわかりませんから、ただ「はい、はい」と花火師の指示に従うことにしました。

まず、配られた揃いの法被(はっぴ)をまといました。これを着ていれば、遠くから見ても「あそこに花火師がいる」とわかりますから、目印になるという意味で便利です。それに、法被の生地である木綿は火が着きにくく、万が一火の粉を浴びてもすぐに燃え上がるようなことがないのです。

ちなみにこの日は「ナイロンなど燃えやすい化繊の服は絶対に着て来ないように」という指示がありましたので、燃えにくい木綿の服を着て行ったことは言うまでもありません。

次に、花火の準備です。まずは重い鉄製の筒を何本も地面に並べて置き、それらをロープでしっかりと固定しました。これらの筒が、花火の発射台となるのです。

万が一この筒が倒れた日には、花火があさっての方向へ飛び出して大事故につながりかねません。ですから念には念を入れて、何があっても倒れないようにしっかりと筒を固定しました。

その次に、たったいま設置しばかりの筒の中に、黒色火薬というものを仕込みました。黒色火薬とは、木炭と硫黄と硝酸カリウムを混合した火薬で、花火それ自体を上空に打ち上げるための燃料となる火薬です。

花火はかなりの重量がありますから、空に飛ばすためには結構なエネルギーが必要です。そのためのエネルギーが黒色火薬なのですが、万が一、分量が少なすぎれば花火が途中までしか上がらずに爆発してしまい、下にいる人たちに大量の火の粉が降りかかってしまうでしょう。反対に量が多すぎれば、地上で筒ごと破裂してしまう可能性があります。

どちらにしても大事故につながりかねませんから、黒色火薬を筒に仕込む作業は必ずふたり一組で行ない、ひとりが火薬を入れ、もうひとりが声に出して火薬が入ったことを確認しました。

このあと、花火師があらかじめ工夫に工夫を重ねて作った花火が、筒の奥深くに収められ、導火線がつけられます。これでスターマインの打ち上げ準備は完了です。これとは別に、連続早打ちというのものもあるのですが、それについては後述します。

どうですか。簡単に「花火の打ち上げ」と言いますが、ここまでだけでも、かなり神経をすり減らす作業だということがわかりいただけたでしょう。

できることなら、ここでゆっくり休んでしまいたいところですが、そんな暇はありません。このあと花火大会が始まるまでは、誰かが現場に残ってあたりを見守っていなければなりませんから。なにしろここには大量の火薬があるのです。放置して、不慮の事故でも起こったら大変ですからね。

さあ、いよいよ花火大会の開始です。さきほどセットしておいたスターマインの導火線に花火師が火を点けると、頭の真上の夜空では大輪の花々が次々に炸裂しはじめまし

た。それはもう、恐ろしいほどの美しさ。壮絶な大音響に、今にも鼓膜が裂けてしまいそうです。

しかし最も大変なのは、「十号三発」とか「五号十発」というような連続早打ちでしょう。早打ちの場合には、ひとつの筒からたくさんの花火を次々に打ち上げるため、弟子たちは大きな花火を抱きかかえて列をなし、前の人が終わると次の人がすぐに花火を運んで行って、それを花火師に手渡すのです。

花火の下部にはあらかじめ黒色火薬がガムテープで貼り付けられています。弟子から受け取った花火を花火師が筒に入れるやいなや、黒色火薬が筒の底にある火種に接触し、花火はまさに火の玉となって夜空に飛び出してゆきます。このタイミングを少しでも誤ると大事故です。

爆発の衝撃は凄まじいわ、空から火の粉は降って来るわけで、そのへん一帯はまるで戦場のよう。先刻からの大音響で、鼓膜の奥がキーンと痺れたような感覚でした。

火の粉が地上の花火にかからないよう、弟子たちは法被を着た上半身を倒し、花火に覆いかぶさるようにして、まさに身を挺して花火を守っていました。ほんとうに、いま思い出しても、あれはとてつもない体験でした。

あれから時はめぐり、最近では打ち上げ花火はすべてコンピュータ制御されるようになって、あらかじめ準備さえ済ませておけば、打ち上げ時にいちいち手で着火する必要はなくなりました。とはいえ、火薬を扱う花火師さんが、今も極限まで神経を使うお仕事であることには変わりはないでしょう。

私たちは目に見えるものだけを見て、それが物事のすべてだと勘違いしてしまいがちですが、どんなものでも——特にそれが美しいものであればあるほど——その縁の下には、危険なことや汚いことに身を挺して努力している誰かが、実はいるのかも知れません。たとえば、一見とても優雅に見える花屋さんという職業は、実際にはたいへん過酷な重労働だと聞いたことがあります。

「キレイな花に囲まれているだけでお金がもらえて、いい商売だな」

なんて表面だけを見ていると、花屋さんの苦労には永遠に気づかないかも知れませんが。

そのことに気づけるようになっただけでも、私はあのとき花火師の手伝いをして本当に良かったなと思うのです。

≪ [第28回 日本人、最高!](#) [第30回 五筆和尚伝説](#) ≫

山田 真美 (やまだ・まみ) プロフィール紹介

作家、日印芸術研究所言語センター長。密教学修士(高野山大学)。現在、お茶の水女子大学大学院博士課程後期在学中。

1960年長野市生まれ。明治学院大学卒業後、ニュー・サウス・ウェールズ大学(豪)でマッコウクジラの回遊を研究。その後インド政府の招聘でヒンドゥー神話を調査研究。

1996年より6年間ニューデリー在住。

主な著書にダライ・ラマ法王へのインタビューも収録した『死との対話』、ベストセラーとなった『ブースケとパンダの英語でスパイ大作戦』など。

訳書に第二次世界大戦の秘史を扱った『生きて虜囚の辱めを受けず』。

長年にわたりインドを日本に紹介してきた功績を認められ2007年、インド国立文学アカデミーより世界で3人目となるドクター・アーナンダ・クマラスワミ・フェローシップを受ける。

財団法人日印協会理事。日本文化デザインフォーラム、日本蜘蛛学会、宇宙作家

クラブ会員。国立天文台広報普及委員会委員。

山田真美 公式ホームページ: <http://www.yamadamami.com/>



買ってはいけない一眼レフ

一眼レフ難民急増中 無料の対策講座 phad.jp/wp3へ進む



[▲このページの先頭へ](#)



© 2002-2016
真言宗豊山派 金剛院

[永代供養墓 密厳霊塔](#)

[しいなまち みとら](#)

[こんごういんキッズ](#)

[メディアで紹介](#)

[ぶつぶつ雑記ブログ](#)

[唱えてみよう!](#)

[ないけんしてみよう!](#)

[東京お寺めぐり](#)

[ばばばのレシピ](#)

[真言宗について](#)

[仏教いちねんせい](#)

[まんが 小坊主くん!](#)

[ぶつ仏クイズ](#)

[ふしぎな密教法具](#)

[金剛院イベント情報](#)

[金剛院NewS](#)

[金剛院について](#)

[金剛院の四季](#)

[地図・アクセス](#)

[メールを送る](#)

[おすすめリンク集](#)

[バックナンバー](#)

[サイトマップ](#)

英語は81文で何でも話せる聞...

「かけ算九九」のように英語をマスター。英語のしくみは単純だ。
simpleenglish81.comへ進む

